

令和8年度愛媛大学大学院医学系研究科 看護学専攻

博士前期課程 選抜試験 [小論文] 解答例・出題意図

[出題意図]

小論文のテーマ1～3は、それぞれ近年の保健医療福祉分野において注目されている。本問では、これらのテーマに対する知識だけでなく、課題に対する保健医療福祉の現状の分析力、洞察力、論理的思考力を問うものである。

[解答例]

テーマ1. 健康寿命の延伸

1. 保健医療福祉の現状、社会の情勢等について論じている

2019年に策定された「健康寿命延伸プラン」は、健康寿命の目標と、その目標を達成するための施策について定めたもので、2040年までに健康寿命を男女ともに2016年に比べて3年以上延伸し、75歳以上とすることを目指している¹⁾。

2. 1をもとに、保健医療福祉の課題を論じている

健康寿命延伸に対する無関心層の存在や、医療人材の偏在・超高齢化社会など地域格差が存在する。

3. 2をもとに、どのような対応が必要か論じている

健康無関心層も含めた予防・健康づくりの推進、地域・保険者間の格差の解消、に向け「自然に健康になれる環境づくり」や「行動変容を促す仕掛け」など「新たな手法」を活用し、「次世代を含めたすべての人の健やかな生活習慣形成」「疾病予防・重症化予防」「介護予防・フレイル対策、認知症予防」の3分野を中心に取り組みを推進していくことを厚生労働省は推奨している¹⁾。

[参考資料]

1) 厚生労働省 e-ヘルスネット 健康寿命延伸プラン

<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/hale/h-01-004.html>

テーマ2. 人生の最終段階における医療

1. 保健医療福祉の現状，社会の情勢等について論じている

人生の最終段階の医療および療養生活の質に関する調査結果報告（令和5年度調査）²⁾によると，医師との療養場所の話し合いや望んだ場所で過ごせた割合は25～53%，医療者は患者のつらい症状にすみやかに対応していたとする回答は65～81%であり，がん患者における苦痛の緩和では，回答割合が低い水準にとどまっていることが示されている。

2. 1をもとに，保健医療福祉の課題を論じている

人生の最終段階において，患者と医療職が十分な話し合いができていないことで生じる影響を明らかにし，具体的な対策を検討する必要がある。人生の最終段階には，ある程度予後の見通しが可能ながんのような疾患の場合，急性増悪と改善を繰り返しながら徐々に状態が悪化する慢性疾患の場合，数か月から数年の期間を経て徐々に状態が悪くなる老衰など，いくつかの場合がある。病床機能分化が進むことにより，その時々状態に合わせ，集中的な医療が必要な期間に限り，必要な医療機能の病院に入院することになる。そのため，療養の場が自宅から病院，病院から介護施設，介護施設から別の病院と刻々と変化し，提供される医療やケアの継続が困難になる事例や，対象者やその家族が状態の変化を受け止めきれないことも多い。

3. 2をもとに，どのような対応が必要か論じている

「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」³⁾では，「人生の最終段階における医療及びケアの在り方」として，適切な情報の提供と説明がなされ，それに基づいて患者又は利用者等と医療職が話し合いを行い，患者又は利用者等の意思決定を基本とすること，多職種から構成されるチームにおける判断の重要性，症状を緩和し全人的なケアをすることの必要性が整理されている。また，「人生の最終段階における医療及びケアの方針の決定手続き」として，患者の意志が確認できる場合と，できない場合に分けてプロセスを整理するとともに，施設内に複数の専門家から構成される委員会を設置し，困難事例において検討・助言をすることの必要性が言及されている。

[参考資料]

2) 2021年に死亡した患者遺族を対象とした調査結果から見える実態と課題

人生の最終段階の医療および療養生活の質に関する調査結果報告（令和5年度調査）

https://www.ncc.go.jp/jp/information/pr_release/2025/0703_2/index.html

3) 日本看護協会 人生の最終段階における医療と倫理

<https://www.nurse.or.jp/nursing/rinri/text/basic/problem/jinsei.html>

テーマ3. 保健医療福祉における Evidence-Based Practice (EBP)

1. 保健医療福祉の現状, 社会の情勢等について論じている

EBPは「利用可能な最良のエビデンス・医療者の経験・患者の価値観を統し、最善の医療を行う」という考え方であり、医学的な治療だけではなく、看護やリハビリなども含まれる。

2. 1をもとに, 保健医療福祉の課題を論じている

効果や不利益に関するさまざまなエビデンスが研究から示される中、「適用すること（適用しないこと）が望ましいケアや治療が、実際の臨床で行われていない（行われ続けている）」という Evidence-Practice Gap も生じている⁴⁾。

3. 2をもとに, どのような対応が必要か論じている

臨床ガイドラインや系統的レビューだけでは臨床で求められる情報が不足している場合やエビデンスの更新が早い分野は、最新の情報を得る方法や研究の質、結果を吟味するすべを知っておく必要がある。また、エビデンスを実践に適用し継続するためには、周囲の理解を得ることなどの準備や工夫、多職種との連携が求められる。

[参考資料]

4) 医学書院 医学会新聞 Evidence-Based Practice 思考でいこう！

https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2021/3418_04